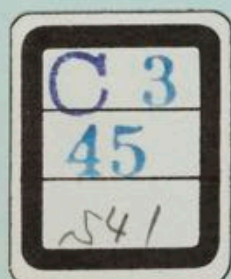
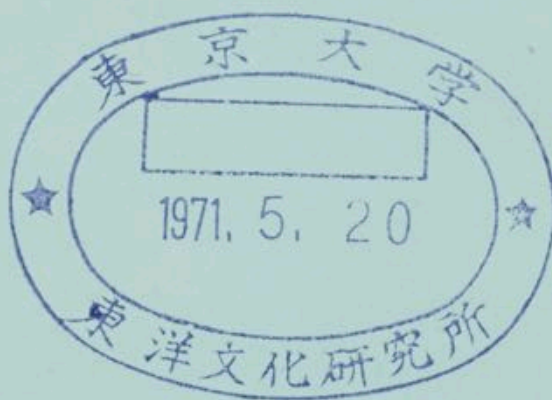


東京大学

東洋文化研究所概要

昭和 41 年 5 月



東京大学東洋文化研究所

東京大学図書

<10>6470040004

東京大学東洋文化研究所



東洋文化研究所本館



東洋文化研究所大塚分室



革

本研究所は、昭和16年11月26日、勅令第1,012号をもって、東京帝国大学に附置創設された。当初は哲学・文学・史学部門、法律・政治部門、経済・商業部門の3部門を発足したが、官制公布後まもなく太平洋戦争勃発という不測の情勢変化のため、拡張計画は中絶を余儀なくされ、戦後ようやく昭和24年1月にいたって新たに3部門の増設を認められた。その結果、部門組織を細分して、哲学・宗教部門、文学・言語部門、歴史部門、美術史・考古学部門、法律・政治部門および経済・商業部門の6部門に再編成し、ついで昭和26年に文化人類学と人文地理学、さらに昭和35年には研究体制を地域区分に対応させて整備する将来計画にもとづき南アジア部門、昭和39年に東北アジア部門の増設が認められ、計10部門を擁することとなった。なお、昭和41年に東洋学文献センターが附属研究施設として置かれた。

Ⅱ 目的と構成

本研究所は、日本を含むアジア諸地域の政治・経済・社会・文化などの組織的、総合的研究を目的としている。もちろん、現在の程度の規模をもってしては、広汎なアジア諸地域における諸般の問題を同時に究明することは望みえないので、研究者の専門にしたがって、重点的に課題を選ぶとともに、各専門分野の孤立を避けるため、合同の研究會によって研究者間に共通の問題意識を育てつつ、個別的には達成しがたい総合研究の実を挙げるよう努めている。また、研究陣容の補強を図るため、毎年の研究計画に従って、学内および学外からも専門研究者に研究を委嘱し、研究班に協力を求める方針をとっている。アジア諸地域の研究が、戦後はとくに問題山積の状況にあり、今後とも重要性が増大する一方であること、本研究所が現在、アジア研究のセンターとして、本学に特設された唯一の研究機関であることを

考え合わせると、この程度の組織機構では、まだいかにも不十分である。従来日本の学界に蓄積の乏しい領域を開拓すべき研究者の養成に努力しつつ、地域全体を対象とした初期の学科別部門編成から、さらに東アジア、東北アジア、東南アジア、南アジア、西アジアおよび内陸アジアのような地域区分にしたがって、これらの研究部門を整備し得る規模にまで陣容の拡大されることを期待している。

部門別教官配置表

汎アジア経済

教授 川野重任 講師 松井 透 助手 池端雪浦

汎アジア人文地理学

教授 飯塚浩二 助教授 大野盛雄 助手 (休)板垣雄三

汎アジア文化人類学

教授 泉 靖一 助教授 中根千枝 講師 築島謙三 助手 松谷敏雄
黒田和彦

東アジア政治・法律

教授 福島正夫 助手 加藤祐三

東アジア歴史

教授 江上波夫 助教授 松本善海 佐伯有一 助手 石田米子
浜島敦俊

東アジア美術史・考古学

教授 米沢嘉圃 助教授 深井晋司 助手 甘粕 健

東アジア哲学・宗教

教授 小口偉一 講師 鎌田茂雄 助手 江島恵教 伊藤知恵子

東アジア文学

教授 窪 徳忠 助教授 尾上兼英 助手 山之内正彦

東北アジア

教授 関野 雄 助教授 鈴木 敬 助手 梶村秀樹

南アジア政治・経済

教授 橋本秀一 (併) 山本達郎 助教授 荒 松雄 山崎利男

助手 (休) 榎本暢子 月輪時房

Ⅲ 設 備

1. 建 物

本研究所は、当初、本学構内に建物をもつことが予定されていたが、戦争の拡大により計画の実現が不可能となったので、暫時、本学附属図書館内に研究室、書庫、事務室を置いた。昭和23年4月1日、外務省所管の東方文化学院の解消をみるに及んで、同年7月に同学院東京研究所の所在地であった大塚に本拠を移すこととなり、外務省研修所と同居という暫定的な形で、旧学院の建物の一半を使用し、従来利用していた附属図書館研究室の一部を分室とした。このように、研究施設としてまことに遺憾の多い状況のまま20余年を数えるにいたったが、さいわい本学構内に建物を新築する計画が具体化し、その一部の工事が完成して、昭和40年10月に研究室の一部と事務室が移転した。そして第2期の工事計画は目下進められている。

2. 図 書

本研究所に収蔵する図書資料は総数260,000冊に及び、平均年間約5,000余冊ずつ増加している。収蔵するに至った主なものをあげると、創設当初、大木幹一氏から中国法制関係書を主とした漢籍45,000余冊の寄贈があり、附属図書館からも相当数の東洋学関係書が移管された。東方文化学院解消後は、同学院蔵書10数万冊(和漢洋)をも使用することとなった。また、帝国学士院東亞諸民族調査室の解散に伴ない、戦後その蔵書2,000冊(和漢洋)の移管を受けた。文部省科学研究費交付金に

よる購入書としては、昭和25年度に松本忠雄氏旧蔵の東亜外交関係書3,000余冊（和漢洋）、同26,28年度に長沢規矩也氏所蔵の多数の希観書を含む中国戯曲小説関係書3,000余冊（漢）があり、さらに同27,28両年度には矢吹慶輝、清野謙次両氏の旧蔵書800余冊（洋）を購入したが、これは前記帝国学士院からの移管書とともに人類学・民族学関係の重要資料となっている。また昭和33年度から昭和40年度まで、文部省科学研究費による総合研究「アジア地域の社会」および特定研究「アジア・アフリカ地域研究」の一環として関係資料を多数蒐集した。昭和27年度から5カ年にわたり下中弥三郎氏より、主として戦後中国・朝鮮で刊行された人文・社会科学関係書4,000余冊の寄贈を受けたが、その後もこの関係の書を鋭意継続して蒐集している。なお、最近、東京銀行調査部から主として経済関係の図書15,000冊（和漢洋）の寄贈を受けた。

Ⅳ 研究概要

1. アジア経済秩序と発展の構造

教授 川野重任，研究委嘱 原覚天

アジア諸国の多くは第2次大戦後政治的に独立し経済発展を急いでいる国々である。そこには資本形成、市場確保、経済計画などの多くの経済的問題をかかえている。本研究班はこれらの問題を理論的に解明することを目的としている。

本年度は成長率の高低を基準として類型分析を行なうこととし、川野は台湾を研究対象として、その成長率の基礎について資本形成、投資市場政策などを中心として分析した。原は経済援助の類型とその効果について地域内諸国全般に通ずる問題として分析した。

2. 西アジア研究

教授 飯塚浩二・小口偉一，助教授 大野盛雄，助手 板垣雄三，研究委嘱 加賀谷寛

本研究所が研究体制を地域区分に対応させて整備する方針をとり、この方針にしたがって南アジア部門の創設をみてから5年になるが、西アジア部門の設置は、東南アジア部門のそれとともに、いまだに実現されていない。今日の国際政治・経済において、東・西問題、南・北問題の焦点となっているのはインドネシアから北アフリカにかけてのイスラム諸地域である。西アジア研究即ちイスラム研究というわけではないが、本研究班は、イスラム文化の中心地域を対象に、研究所の部門構成の欠を補うべく、その作業をおこなっている。

飯塚はすでにイスラム文化の世界史的意義と役割について問題提起をおこなってきたが、本年度は、その提言のもとに「イスラムとアフリカ」の研究をすすめた。大野は現地での2年間の実態調査の成果を「イラン農村の社会経済構造」としてまとめた。板垣はアラブ連合にあって民族主義の形成と発展の分析に従事している。加賀谷はイランを中心に西アジアにおける近代思想運動の解明に努め、小口はバハイズムの諸地域における発展をあとづけるとともに、これが日本における宗教運動に及ぼした影響についての究明を試みている。

3. インドにおける支配体制と社会構造

助教授 荒 松雄・中根千枝・山崎利男、講師 松
井透、助手 榎本暢子、研究委嘱 中村平治・古賀
正則

本研究班は、前年度にひきつづいて、インドにおける支配体制と社会構造の歴史的変遷を中心に研究を進めてきた。山崎は、古代を担当し、アショーカの古代帝国統一の問題を考察した。またインド国独立後のヒンドゥー法改革をめぐる歴史的意義を解明し、18世紀後半から19世紀はじめにかけてのヒンドゥー法の形成問題をあわせ考察した。荒は、インドにおけるイスラムとムスリム社会の問題を、政治権力と民衆の改宗に関して考察した。松井はイギリス支配下のインドにおける土地制度の問題をひきつづきとりあげてきたが、同時に、19世紀のイギリス本国の政治思想家のインド観についても考察して、外国支配の論理を追及し、英印関係の解明に努

めた。中村は、19・20世紀のインドのブルジョアジーについての研究をつづけ、会議派政権の中心にあったネルーについても独立前後の政治過程とあわせ考究した。古賀は、経済地理学の方法にたつて、インドの土地改革と村落の指導階級の問題、さらに5カ年計画実施にあたっての国営部門についての考究を試みた。中根は、本年度の前半は、米英伊諸国での在外研究を行なってきたが、帰国後は、インドに関しては、ベンガルを中心とする合同家族制度の問題をまとめている。なお、荒は、本年度から、パキスタンの政治・社会に関する研究にも着手した。

4. 新旧両大陸における文明起源の比較研究

教授 江上波夫・泉靖一，助教授 深井晋司，助手
松谷敏雄，研究担当 曾野寿彦・増田昭三・寺田和
夫，研究委嘱 増田精一・三宅俊成

東京大学総合研究会のテーマとして「新旧両大陸文明起源調査委員会」が設けられ、旧大陸へは「イラク・イラン遺跡調査団」が、新大陸へは「アンデス地帯学術調査団」が派遣されて、調査研究を行なってきた。本年度は、前者の調査団がイラクにて発掘調査を行なった。

本年度の研究発表として、泉は大貫良夫とともに、コトシュ遺跡の発掘成果を中心として、中央アンデスにおける形成期の文化を考察し、江上と泉が新旧大陸の文明起源の比較を行なった。その結論として、＜文明につながる諸文化要素が文明発生地の各地で発明、発見され、それら文化要素が統合されて、次の大きな発展を導いた＞という作業仮説をうち出した。今後この仮説を証明するために、より多くの事実を蒐集し、文明起源の過程をあとづけることが、本研究班の研究課題である。

5. デリー諸王朝時代の建造物の研究

教授 山本達郎，助教授 荒 松雄，助手 月輪時
房

本研究班は、海外学術調査の項で述べたように、昭和34・36年度に東京大学インド史跡調査団が行なった現地調査の資料をもって行なう研究のために組織されてき

た。この研究は、13世紀から16世紀に至るいわゆるデリー・サルタナット時代の建造物のうち、デリー地域に現存するものを中心に行なうもので、本年度は、調査報告書としての研究成果刊行計画とにらみあわせて、墓と水利施設に関する研究に重点をおいた。山本と月輪とは、トゥグルク朝初期のいわゆるギースッディーン=トゥグルクの墓、およびサルタナット末期に属する四角型と八角型の代表的な二墓（シハーブッディーン=タージ=ハーンの墓およびいわゆるムハンマド=シャーの墓）の三建造物を中心に、構造・様式上からする種々の研究を行ない、他のおよそ60に及ぶ墓との対比にもとづく研究を行なった。これに対して、荒は文献、碑文を主とする歴史的研究を担当し、奴隷王朝のいくつかの墓、および水利施設のうち、とくに堰堤と水門とについて研究した。

6. 東南アジア研究

教授 橋本秀一・山本達郎, 講師 築島謙三, 研究

担当 大林太良, 研究委嘱 和田久徳, 関 寛治

東南アジア研究は本研究所創立当初からの伝統をもっているが、いまだ研究部門が置かれていないし、多分野の研究者が総合的に研究することを目的とした本研究班が設けられたのは比較的最近のことである。本年度は、歴史学、政治学、経済学、文化心理学、文化人類学の各分野の研究者によって構成し、地域内の各国の研究を通じて、相互に密接な連絡をもって考究することに努めた。

まず、ヴェトナム問題について、山本は歴史的考察を通じて、関は国際政治学の分析方法をもって考察して、それらの報告について討論した。

個別研究としては、橋本はセイロンの国民所得と産業関連の問題を論究し、築島はマレーシアの戦後の統治の推移、建国の理念について検討し、およびマレー人の民族意識に関する現地調査の結果をまとめた。和田は東南アジアの華僑を研究し、とくにインドネシアの初期の華僑社会について考察した。大林はインドシナ諸民族の葬制について、とくに先年現地調査をしたタイ国北部の諸族を中心として報告した。

7. 中国古代の政治機構

教授 関野 雄，助教授 松本善海，助手 松丸道
雄，研究担当 西嶋定生，研究委嘱 小倉芳彦・堀
敏一

殷代から唐代にいたる政治機構を，社会・経済・思想・制度など，多方面から検討した。

まず松丸は，殷代王室世系に関する従来の研究を回顧したのち，張光直の新見解——クロス・カズン婚の指摘——を紹介批判し，王妣の問題——子王と母妣（法定配偶）の関係——を通じて，殷王室の構造に新しい推測を加えた。また関野は，先秦諸国の経済機構を通貨制度の上から解明しようとする努力を継続し，一部の布銭や円銭にあらわされている「鉞」の字の意義を考究するとともに，新出土の資料によって，刀銭に関する旧稿を補訂した。いっぽう小倉は，「礼」を基準として，それに合致した「華夏」と，それから外れた「夷狄」とを峻別する，いわゆる華夷思想——その戦国時代における形成過程——について検討した。また西嶋は，君主の名称が王から皇帝になったということの意味を，国家構造の変化と結びつけて考察した。

つぎに堀は，北魏初期の徒民への授田と漢以来の豪族勢力と均田制との関係を追究し，さらに秦漢以来，皇帝支配の下で形成されてきた良賤制が，この時代の人民層の分解に対応するため，唐代の複雑な賤民制度を生み出したことを論証した。また松本は，これまで行なってきた一連の研究をさらに発展させ，唐代の坊里制と隣保制について考察し，その実態を明らかにした。

8. 中国における農村機構の史的研究

助教授 松本善海・佐伯有一，助手 浜島敦俊，研
究担当 周藤吉之，研究委嘱 田中正俊・小山正明
・柳田節子・西川正夫

本研究班は、中国の「近代化」の歴史的諸前提の中で、最も基本的な課題たる農村機構の変革の過程を、国家権力の支配体系、土地所有制、生産過程、階級構造、末端権力の支配構造の各側面から追求した。

周藤は、官田制度および「経界法」を通して、宋代土地所有制の基本構造の特質を考究し、柳田は、戸等制のもつ意味と、地主的土地所有の地域的に異なった構造をどうとらえるべきかを考え、浜島は、江浙三角洲地帯の水利慣行（明末清初）の分析を通じて、この時期に中・小地主の支配を利用する農村支配構造の再編を発見し、小山は、とくに明代税役制における戸等制を追求して、国家の農民把握の構造に照明を与え、田中は、19世紀末中国農村工業の特質を明らかにし、松本は、清代中期の保甲制確立の意義を問い、西川は、清朝末期の変革期湖南の農村の階級関係と闘争を詳細に分析し、佐伯は、戦前わが国の華北を中心とする慣行調査の成果のもつ意味を追求した。

9. 中国における仏教と道教

教授 窪 徳忠、講師 鎌田茂雄、研究委嘱 野田

幸三郎・泰本 融・塩入良道

中国における仏教と道教との関係・交渉を究明することを主題とする本研究班は、本年度はとくに道教が仏教の影響を受けて宗教的体裁を整えたことと、および外来思想たる仏教の受容とその定着過程とをとりあげた。

窪は道教の成立をとりあげ、とくに道教教団の成立を究明した。また宋代における全真教の成立に関して考察を加え、仏教の影響によって成立した新道教の歴史的な性格を明らかにした。さらに老子化胡説に対する従来の説を検討して、新たな説を発表した。塩入は中国における仏教の受容過程を問題とし、とくに中国仏教における地獄観の形成過程をとりあげ、それをインドの他界観念と比較し、天台智顛の地獄観・人間観の特質を明らかにした。泰本は中観思想の受容をとりあげ、吉蔵の主著たる「中観論疏」に対して注釈的研究をおこなうとともに、インドから中国にわたる中観思想の展開過程を究明した。鎌田も中国的仏教の成立について考察を加

え、とくに華嚴思想の形成過程を究明したのにつづき、華嚴経の中心思想や、華嚴教学の根本概念に検討を加え、華嚴思想の構造的把握に努めた。また華嚴思想の源流を明らかにするため、地論宗の淨影寺慧遠を問題とし、とくに法界縁起の成立過程を解明した。

一方、中国宗教の特質は、その朝鮮・日本への伝来を明らかにしなければ、十分に把握することができない。窪は道教の朝鮮伝播を問題とし、とくに李朝の三尸信仰の実態を究明した。野田は、同様の立場から、御灯儀礼の成立・展開過程を考究し、それが中国に起源を有する北辰崇拝にもとづくことを明らかにするとともに、古代日本の宗教儀礼全体において占める御灯儀礼の位置づけを試みた。

10. 中国絵画の伝統と創造

教授 米沢嘉圃，助教授 鈴木 敬，研究委嘱 川
上 涇・戸田禎佑

本研究班の課題は、中国絵画史における伝統と創造の関係を解明することであるが、各人の研究を時代順にあげると、まず古代の問題として、米沢は中国説話画の場面展開に見出されるインド系と中国系の両方式を比較し、インド方式と異なる中国方式の特質を明らかにした。中世では、戸田が五代北宋の墨竹をとりあげ、ついで墨竹家文同を中心とした北宋文人画の発生を論究した。鈴木は北宋の宮廷画院とその山水画様式について考察し、また画僧玉澗若芬の問題を再検討して、玉澗は玉澗若芬であることを確かめた。明の王誥や墨梅家潘賜の研究を行なった川上の目標は、それらの研究を通して明代における日中文化交流の一側面を明らかにすることであった。

このほか、米沢はわが国現有の中国絵画の性格とその意義を考察し、また日本の南画（文人画）の特質を明らかにする一手段として中国文人画の問題をとりあげた。戸田もわが国に将来された中国南宋画や渡来画人について研究した。

11. 中国の思想と文学

助教授 尾上兼英，助手 木山英雄・山之内正彦，

研究担当 小野 忍, 研究委嘱 野村浩一・近藤邦
康・竹内 実・新島淳良・丸山 昇

思想の研究では、野村、近藤の協力で、民国初年の西欧思想の受容を陳独秀・李大釗を中心に解明し、あわせて変法派——康有為・譚嗣同、革命派——章太炎との関連における位置づけの研究を継続し、近藤は閉ざされた世界をつき破ろうとする李大釗の「衝決経羅」について発表した。

文学の研究は、旧文学の分野では、小野、尾上、木山が明代の長篇小説——水滸伝・金瓶梅などと、短篇小説集——三言二拍のテーマ別の関連と成立過程について研究し、尾上が短篇小説の傾向と清代における創作態度の変化に対する見通しを発表した。また山之内は清代の詩において従来とりあげられていない王船山の占める位置について発表した。

近現代文学に関しては、丸山、竹内、新島によって五四時期の魯迅の伝記的事実の再調査をはじめ、1930年代の「第三種人論争」「国防文学論争」の再検討、及び「延安における毛沢東の講演」をめぐる整風運動といわゆる人民作家の動向について継続した研究を加え、あらたな知見にもとづいてそれぞれ成果を発表した。

12. 中国近現代史の研究

助教授 佐伯有一, 助手 石田米子, 研究担当 古
島和雄, 研究委嘱 野沢 豊

本研究班は、中国の近現代史の発展の総過程の把握を目指し、諸変革期の論理構造の動態的把握を方針としている。

佐伯は、いわゆる大革命を、労農運動を基軸とすることによって把え直そうとし、石田は、とくに抗日戦争期の革命戦争のもつ人民性を追求し、野沢は、抗日戦争期の、日・中両国間の政治過程と政治状況に対する日・中両国民の受けとめ方を明かにし、古島は、革命前夜の支配権力の根幹をなす官僚資本の史的性格について分析を加えた。

13. 現代中国および朝鮮の法と経済

教授 福島正夫, 助手 梶村秀樹, 研究委嘱 本橋
渥・針生誠吉・福島 裕・常盤絢子

本研究班は、中国およびこれに隣接する朝鮮の法と経済の構造ならびにその発展を社会科学的方法により分析し究明することを目的とする。中国と北朝鮮は社会主義国に属するので、他の社会主義国家の法と経済との対比において研究を行ない、また、近時、北朝鮮が社会主義陣営のなかでかなり個性的な政治・経済の制度を創出しつつあるので、これについて他の国々の制度と比較考察してきた。

本研究班は、所外の研究者をも招いて研究会合を開き、共同研究を推進してきた。本年度は、福島（正）が「中国法における二種の矛盾の理論の適用」について、本橋が「社会主義権力と下放」について、それぞれ法と政治の分野における最近の注目すべき動向について報告し、また、所外から、高昇孝が、ソ連の経済学教科書の記述に関連して、朝鮮経済学の発展を紹介し、佐藤経明がソ連の利潤原則の導入や物質刺激などの問題を、中国の立場と対比して論じた。

個別研究としては、福島（正）が人民公社政策の重点のひとつである生産隊の会計制度を研究し、本橋は社会主義権力の機能形態を究明し、針生はとくに人民公社の政社合一におけるプロレタリアート独裁の問題、並びに中国法の特徴としての過渡期の法理論を論究した。福島（裕）も中国の過渡期の農村・農民問題として人民公社をとりあげ、そこにおいて北朝鮮における地域的拠点を対比して考察した。常盤は中国農業の問題を研究し、これを全中国经济の再生産構造とかかわらせ、ここに中国社会主義建設のモデルを見出そうと努めた。

梶村は北朝鮮の最近の最も注目すべき制度である郡協同農場経営委員会の成立、機能について詳しく考察した。

14. 中国の国際関係

教授 福島正夫, 研究担当 衛藤藩吉, 研究委嘱
坂野正高・関 寛治

本研究班は19世紀および20世紀の中国をめぐる国際関係における諸様相を政治学

的に分析し究明することを目的とする。

坂野は中国の国際関係を歴史的に理解するために英国人の中国観をとりあげ、昨年度に引続いて、マカートニー使節団の派遣（1793年）から辛亥革命までの時期を検討し、かれらの問題関心の推移と中国観の変遷をあとづけた。衛藤は1924年から1928年まで日華緊張に対する日本人の態度について考察した。これは同時期の「朝日」と「日日」の両新聞を資料として、新しい数量分析の方法を用いておこなったものである。

関は現代中国の世界政治における行動体系をとらえるモデルを国際体系論のなかでつくることを研究目標とし、とくにモデルの有効性をシュミレーションのような経験的方法で検証する可能性について模索した。

15. 東アジア史における日本文化の形成過程

教授 江上波夫・泉 靖一，助手 甘粕 健，研究

担当 西嶋定生・井上光貞

東南アジアにおける日本文化の形成過程を構造的に理解するために各方面から研究が進められたが、江上は日本列島を、それぞれ風土的条件を異にし、固有の文化的伝統を有する諸地域に分け、地域ごとに縄文時代から古墳時代にいたる文化の推移を通観し、新しいスタイルの文化史の敘述を試みた。甘粕は上記の研究に協力したが、一方、前方後円墳の造営企画を分析し、その造営に中国王朝の尺度が用いられたことを明かにし、ひきつづき、畿内において定型化した前方後円墳が地方に伝播する過程を追求した。そのために本年度には関東地方の四基の前方後円墳を発掘して復原的研究の好資料を得た。西嶋は中国周辺諸国家の形成過程における高塚墳墓の出現の一元的契機として中国王朝の礼法にもとづく国際的な秩序の存在を想定し、その観点から中国王朝の墓制の推移、特に魏における墓制の実態の研究と、魏志倭人伝の日中関係記事の再検討によって古墳発生に関する新たな学説を提起するにいたった。泉は本年に韓国を訪問、文化人類学、歴史学、考古学など各分野にわたって学術交流の実をあげた。また多年地域的研究の対象として調査研究を続け

ていた濟州島の实地調査を行なった。

16. 近代日本の社会と思想

教授 小口偉一・飯塚浩二・川野重任, 助教授 大野盛雄, 講師 築島謙三, 研究担当 丸山真男・柳川啓一, 研究委嘱 花村芳樹・宮川 透・生松敬三
・森岡清美・井門富二夫

本研究班は、以前、社会班とイデオロギー班とのふたつに分れていたが、明治以の日本社会の究明には、諸現象の総合的な調査研究が必要であるので、これをひとつの班にまとめ、政治・経済・思想・宗教等の相互連関において、これを取りあげることにした。

飯塚は、いわゆる高度成長下の経済の基本問題を解明し、これをめぐって、川野、大野、花村がそれぞれ農業、漁業、工業の問題を実態調査によって構造的に把握分析した。また社会経済問題に関連する政治的状況は、丸山によって思想史的に研究され、宮川と生松は、近代化論を検討しつつ日本文化論の共同研究を試みている。宗教関係では、小口、柳川、森岡、井門が宗教集団の構造変化の共同研究を行っているが、本年度はとくに地域社会における宗教の機能の調査研究に従事した。一方、築島は、従前から手がけている外国人の日本観の研究を継続し、本年度は、英国初代駐日公使オールコックの日本観をあきらかにするとともに、日本観の概念について論究した。

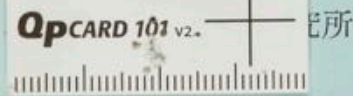
V 刊 行 物

1. 定期刊行物

- (1) 東洋文化研究所紀要 昭和18年12月に創刊、同41年度に第43冊まで刊行する

東京大学

東洋 所概要



所

予定。第10～12の3冊と第25～28の4冊は、それぞれ本研究所創立15周年並びに20周年記念号であり、第41～44の4冊は創立25周年記念号の予定である。

(2) 東洋文化 昭和19年10月に創刊し昭和24年5月にその第11号を発行した「東洋文化研究」を継承したもので、昭和25年2月に創刊、同41年度に第43号まで発行する予定。

2. 報 告 書

(1)東京大学東洋文化研究所紀要別冊			発行年月
仁井田	陸	中国の農村家族	27. 8
周 藤	吉 之	中国土地制度史研究	29. 9
大 林	太 良	東南アジア大陸諸民族の親族組織	30.10
結 城	令 聞	世親唯識の研究 上	31. 1
関 野	雄	中国考古学研究	31. 3
窪	徳 忠	庚申信仰	31.11
仁井田	陸	中国法制史研究 刑法	34. 3
仁井田	陸	中国法制史研究 土地法・取引法	35. 3
米 沢	嘉 圃	中国絵画史研究	36. 3
結 城	令 聞	唯識学典籍志	37. 3
仁井田	陸	中国法制史研究 奴隸農奴法・家族村落法	37. 3
築 島	謙 三	文化心理学基礎論	37.11
窪	徳 忠	庚申信仰の研究 年譜篇	37.12
仁井田	陸	中国法制史研究 法と慣習・法と道德	39. 3
鎌 田	茂 雄	中国華嚴思想史の研究	40. 2
江 上	波 夫	アジア文化史研究 要説篇	40. 3
泉	靖 一	濟州島	41. 3

VI 東洋学文献センター

昭和41年4月、本研究所に、附属施設として、東洋学文献センターが置かれることになった。本センターとしては、とくに旧中国の政治・法律および文学・演劇関係の図書、戦後中国および朝鮮の刊行物を蒐集し、所蔵資料図書の目録を整備するなどして、広く研究者の利用に資する予定である。

XII 海外学術調査

本研究所が海外で行なっている調査研究事業は、つぎのふたつである。

1 江上波夫教授を団長とする東京大学イラク・イラン遺跡調査団は、昭和31～32年、35年、39年の4回にわたって、イラクおよびイランにおいて6ヶ所の古代遺跡の発掘を行ない、「文明の起源とその初期の様相」の問題という人文科学における世界共通の現代的課題の解明に努力し、また「東亜及び日本古代文明の源流としての古代イラン文明」というわが国にとって特別関心のある問題の究明に努めてきた。

本年度は、昭和40年6月から41年1月にかけてイラク国およびイラン国において3ヶ所の古代遺跡の発掘並びに調査を行なった。即ち、イラク国のテル・サラサート第1号丘と第5号丘の発掘、さらにイラン国のタル・イ・ムシュキの発掘では文明の起源とその初期段階の様相という課題の解明に努力し、イラン国のターク・イ・ブスタンの調査では、東亜および日本古代文明の源流としての古代イラン文明という東西文化交流の問題の解明に努めて来た。また発掘調査終了後、41年2月から3月にかけてヨルダン、レバノン、シリア、トルコの一般調査を行ない、旧石器時代から近世までの各時代の遺跡を調査・見学し、多数の写真、拓本、各種の遺物標

本など学術上貴重な資料を多数将来することが出来た。

東京大学イラク・イラン遺跡調査団報告書

テル・サラサート I	33. 3
マルヴ・ダシュト I	37. 3
マルヴ・ダシュト II	37. 3
ファハリアン I	38. 3
西アジアの人類学的研究 I	38.11
デーラマン I	40. 3

2 東京大学インド史蹟調査団は、山本達郎併任教授（団長）・荒松雄助教授・月輪時房助手・大島太市研究委嘱を中心に、13世紀から16世紀に至るインドのイスラーム系建造物に関する調査研究を目的とし、昭和34、36年の2回にわたって、デリー周辺地域における諸遺跡、とくに墓、モスク、水の利用に関する建造物などを調査し、その後それらの整理、研究を行なっている。

本年度は、昭和41年度から4年間に報告書を出版するために、作業内容では、資料の整理、とくに各種遺跡の状況・平面・立面・断面等の諸図を作成し、研究面では山本・月輪・大島が建造物の構造と様式上の問題を研究し、および荒が遺跡建造物の歴史的背景を究明した。

附表 1 昭和40年度研究会

昭和40年

4月16日	台湾経済の分析……………	川野重任
4月23日	アジア諸国経済発展における援助問題……………	原 覚 天
	韓国の経済……………	梶田 勝
4月27日	南ベトナム問題について——その歴史的考察——……………	山本達郎
4月30日	イラン立憲革命の諸問題……………	加賀谷寛
	ヨーロッパの危機……………	飯塚浩二
5月7日	ウィリアム・ジョーンズとヘンリー・コールブルーク……………	山崎利男
	——イギリス植民地下のヒンドゥー法の形成——	
5月11日	南ベトナム解放民族戦線について……………	蠟山芳郎
5月14日	19世紀後半のオーストラリアのタルクダリー制……………	榎本暢子
	——植民地支配下の土地制度——	
5月28日	中央アンデスにおける形成期文化……………	泉大貫 靖一夫
	——コトシュ遺跡を中心として——	
6月1日	中国史の方法論……………	トウイチエツト
6月11日	文明起源の比較研究における問題点……………	江上波靖夫
		泉
6月18日	デリー諸王朝の遺跡の編年の問題について……………	山本達郎
		月輪 時房
6月25日	パキスタン・アフガニスタンにおける 考古学的調査の成果……………	水野清一
7月2日	マレーシアにおける国民統合の問題……………	築島謙三
7月13日	セイロンの国民所得と産業連関……………	橋本秀一
7月16日	ベトナム問題をめぐる比較危機論的考察……………	関 寛 治
7月19日	華夷思想の形成……………	小倉芳彦
	中国古代における良賤制度……………	堀 敏 一
9月24日	殷代王室世系上の一・二の問題……………	松丸道雄
	刀銭考補正……………	関野 雄

10月12日	中国における農村マーケットの問題……………	佐伯有	一
10月15日	チベット富農の実態について……………	中根千枝	
10月22日	禅宗の成立……………	鎌田茂雄	
	中国仏教における空観の展開……………	泰本融	
10月29日	中国仏教における地獄観……………	塩入良道	
	全真教の成立……………	窪徳忠	
11月2日	南朝鮮の経済状況……………	中川信夫	
11月5日	中国古代説話画における場面表現の方式……………	米沢嘉圃	
	——インド古代の場合と比較して——		
11月9日	日韓条約における文化財問題……………	旗田巍	
11月12日	元代絵画における北宋様式……………	鈴木敬	
11月19日	明代短編小説のテーマと長編小説……………	尾上兼英	
12月3日	明末清初詩一瞥……………	山之内正彦	
12月10日	譚嗣同と李大釗……………	近藤邦康	
	——「衝決網羅」を中心に——		
12月14日	民族資本, 官僚資本, 買弁資本……………	古島和雄	
12月17日	インドシナ半島の葬制……………	大林太良	
	アメリカベトナム反戦運動のイメージと現実……………	関寛治	
昭和41年			
1月14日	中国における社会主義企業の革命化……………	本橋渥	
	——下放の問題——		
1月21日	朝鮮の郡協同農場経営委員会について……………	梶村秀樹	
1月28日	中国における民主と自由……………	針生誠吉	
2月4日	過渡期と人民公社……………	福島正夫	
	——共産主義への移行過程での農村・農民問題——		
2月11日	中国を英国の外交官はどうみていたか……………	坂野正高	
	——マカートニー使節団の派遣から辛亥革命まで——		
2月18日	濟州島調査報告……………	泉靖一	
3月4日	高度経済成長と就業構造の変化……………	飯塚浩二	
3月11日	祭りと地域社会……………	柳川啓一	
	——秩父神社冬祭り調査報告——		
3月18日	政治権力と集落神社……………	森岡清美	
	——三重県における神社合祀の過程——		

附表 2 昭和41年度共同研究課題

◎印 研究担当

※印 研究委嘱

1. アジア経済発展における日本 班主任 川 野 重 任
 - (1) 川 野 重 任 アジア地域経済発展における日本
 - (2) ※原 覚 天 アジア地域経済援助における日本
 - (3) ※瀧 川 勉 フィリピン経済発展における日本
2. 西アジア研究 班主任 飯 塚 浩 二
 - (1) 飯 塚 浩 二 イスラームとアフリカ
 - (2) 小 口 偉 一 バハイズムの展開過程
 - (3) ※加賀谷 寛 西アジアにおける近代思想運動
 - (4) 大 野 盛 雄 イラン農村の社会経済構造
3. 古代西アジアの民族と文化 班主任 深 井 晋 司
 - (1) 江 上 波 夫 古代西アジアにおける穀物倉の問題
 - (2) 深 井 晋 司 パルティア・ササン朝ペルシア時代の彫刻
 - (3) ◎曾 野 寿 彦 古代西アジア原始農耕集落の形態
 - (4) ※新 規矩男 古代アジア工芸の諸問題
 - (5) ※堀 内 清 治 建築史上よりみたる古代西アジアの都市
 - (6) ※池 田 次 郎 古代西アジアの人種問題
 - (7) ※増 田 精 一 青銅器時代後期ないし鉄器時代初期の西アジア文化
 - (8) ※三 宅 俊 成 古代西アジアの彩文土器の装飾文様について
 - (9) ※杉 山 二 郎 東亜の美術に与えた古代西アジア美術の影響について
の二三の問題
 - (10) 松 谷 敏 雄 西アジアにおける農耕と牧畜の起源の問題

4. インドにおける支配体制と社会構造 班主任 荒 松 雄

- (1) 山崎利男 インド古代の支配体制と社会構造
- (2) 荒松雄 ムスリム支配体制とインド社会
- (3) 松井透 イギリス植民地支配下のインド社会
- (4) ※中村平治 独立後のインドにおける政治過程
- (5) ※古賀正則 独立後のインドにおける国家資本主義
- (6) 山崎利男 現代インドにおけるヒンドゥー法の展開
- (7) 中根千枝 現代インドにおける家族構造と血縁・婚姻組織

5. デリー諸王朝時代の建造物の研究 班主任 荒 松 雄

- (1) 山本達郎 建造物よりみたインドおよびイスラーム文化の交流と変容
- (2) 荒松雄 デリーに現存するサルタナット時代の遺跡の歴史的研究

6. 東南アジア研究 班主任 橋本秀一

- (1) 山本達郎 ヴェトナムの村落と土地制度
- (2) ◎大林太良 インドシナにおける若者宿と集会所
- (3) ◎関寛治 タイ国の政治過程
- (4) 築島謙三 マライ人村落の自治体制
- (5) ※和田久徳 東南アジア華僑社会の変遷
- (6) 池端雪浦 19世紀におけるフィリピンの社会構造の変化
- (7) 橋本秀一 17世紀のセイロン

7. 中国における政治機構とその基礎過程 班主任 関野 雄

- (1) ※松丸道雄 殷周時代の国家構造
- (2) 関野雄 先秦諸国の経済機構
- (3) ※小倉芳彦 戦国秦漢期の政治思想
- (4) ◎西嶋定生 唐代良賤制の研究

- (5) ※堀 敏 一 中国古代末期の支配体制
- (6) ◎周 藤 吉 之 宋代郷村制の変革過程
- (7) ※柳 田 節 子 宋代江南デルタ地帯の土地所有制
- (8) ※小 山 正 明 明代税役制と農村の変化
- (9) 浜 島 敦 俊 明清江南デルタ地帯の水利灌漑
- (10) ※田 中 正 俊 明清時代における農村の階級構成
- (11) 松 本 善 海 清代中期における保甲法の展開
- (12) ※西 川 正 夫 清末民国初期における農村機構
- (13) 佐 伯 有 一 中国革命前夜農村における土地関係

8. 中国の思想と宗教

班主任 窪 徳 忠

- (1) 鎌 田 茂 雄 隋代の仏教と道教
- (2) ※秦 本 融 中国の論理思想と中観
- (3) ※野 田 幸三郎 日本における中国宗教の受容過程
- (4) ※塩 入 良 道 仏教における性悪思想の展開
- (5) 窪 徳 忠 11, 12世紀における道教思想の形成
- (6) 江 島 恵 教 中観思想の形成

9. 中国絵画の伝統と創造

班主任 米 沢 嘉 圃

- 鈴木 敬
- 米 沢 嘉 圃
- ※川 上 涇
- ※戸 田 禎 佑

中国絵画に於ける伝統と創造
(明代呉派の成立について)

10. 中国の思想と文学

班主任 尾 上 兼 英

- (1) ※近 藤 邦 康 清末民初の思想史的考察
- (2) ※野 村 浩 一 五四運動期の思想
- (3) 山之内 正 彦 中晩唐の詩
- (4) 尾 上 兼 英 明清小説の史的研究

- (5) ◎小野 忍 清末の文学
 (6) ※丸山 昇 1920年代の文学
 (7) ※竹内 実 1930年代の文学
 (8) ※新島 淳良 抗日戦争期の辺区における文学
 (9) ※木山 英雄 新文学と旧文学の関係

11. 中国近現代史の研究 班主任 佐伯 有 一

- (1) 佐伯 有 一 労働運動と中国大革命
 (2) 石田 米子 中国民族解放運動史の研究
 (3) ※野沢 豊 抗日戦争期の政治過程
 (4) ◎古島 和雄 中国官僚資本の形成とその構造
 (5) 加藤 祐三 新民主主義革命とその権力の形成過程

12. 現代中国および朝鮮の法と経済 班主任 福島 正 夫

- (1) 福島 正 夫 a) 中国法の構造と性格
 b) 人民公社の所有制
 (2) ※本橋 渥 中国および朝鮮の経済成長とその機構の比較研究
 (4) ※針生 誠吉 中国国家論の基礎理論
 (4) ※常盤 絢子 中国における社会主義経済の発展の型
 (5) ※福島 裕 過渡期と階級闘争の問題
 (6) ※菅沼 正久 中国の流通経済
 (7) 梶村 秀樹 現代朝鮮経済政策史
 (8) ※坂野 正高 同治光緒年間の条約論議
 (9) ◎衛藤 藩吉 満州事変前における中国の対日政策
 (10) ※関 寛治 中国問題のシミュレーション的研究

13. 東アジア史における日本文化の形成過程 班主任 江上 波 夫

- (1) 江上 波 夫 東亜史上より見たる古代日本
 (2) ◎西嶋 定生 古代東アジアにおける国際的政治機構

- (3) ◎井上光貞 日本における律令法の受容過程
- (4) 甘粕健 古墳文化より見たる日本古代国家の形成
- (5) 泉靖一 日本古代における社会組織の比較研究

14. 近代日本の社会と思想 班主任 小口偉一

- (1) 飯塚浩二 高度経済成長と就業構造の変化
- (2) 川野重任 農業の地域構造
- (3) ※花村芳樹 地方商業の諸問題
——東三河を中心として——
- (4) 小口偉一 }
◎柳川啓一 } 戦後における宗教集団の構造変化
※井門富二夫 }
※森岡清美 }
- (5) ※宮川透 }
※生松敬三 } 日本文化論
- (6) ※丸山真男 近代政治思想におけるコトバの問題
- (7) 築島謙三 外国人の日本観

15. アジア諸地域における社会組織と宗教 班主任 中根千枝

- (1) 泉靖一 朝鮮における社会組織
- (2) 中根千枝 チベットの社会組織と宗教組織
- (3) ※村上正二 モンゴルの部族制度
- (4) ※白鳥芳郎 華南の少数民族の社会組織と宗教
- (5) ◎大林太良 インドシナにおける儀礼をとおしてみた征服民族と被征服民族

昭和41年5月2日発行

編集兼
発行者

東京大学東洋文化研究所

東京都文京区本郷7丁目3番1号

電話(812)2111(大代表)

分室 東京都文京区大塚1丁目7番1号

電話(941) {0509(教官,事務)
6986(教官,受付)

(943) {0271(図書室)
2815(イラク・イラン調査室)

東京都港区赤坂青山北町6の40

印刷所 有限会社総合企画センター